永久に残された禍根

豊島與志雄自筆原稿

西垣文庫
文庫10
8840

23

永久に残された禍根

生活力ある民族を養げるな

豊島與志雄

私は此度の大地震の折、北海道旅行中で、四日の午後東京へ帰ってきたのだから、直接に地震そのものを知らない。然し、四日以後見聞した所に依れば、東京市民の被害の大部分は、地震から来たものよりも、地震に次いで起った火災から来たものらしい。そして、この火災に関連して、朝鮮人に対する市民の

感情が、如何様に湧き立つたかが、非常に重大な問題を孕してゐるやうである。

自然に対しては、吾々は一定の脈を据ゑることが出来る。然し人間に対しては、さうかない場合が多い。

一部の多謀な鮮人の行為が、如何なる程度のものであつたかを、私は確かには知らない。また彼らの行為の結果が、如何なる程度のものであつたかをも、私は確かには知らない。然し何かが為され、何かの結果が

10.20 本郷高等学校

起つたことは、否むべからざる実である。そしてその何かは、如何なる程度のものであつたにせよ、断じて許すべからざるものである。

けれど私は、今そのことを云ひたくはない。さういふことに伴つた原因を云ひたい。

甲の民族が乙の民族を、支配し統御することは、如何なる事情があるにせよ、免に角よくないことである。この民族に生活力がある限りは、許さるべきことではない。民

族の自立といふことは、個人の自立といふことと、同様に、もしくは多少以上に（あゼあら、個人よりも民族の方が夢想に乏しいから）、必然の要求である。この必然の要求を考慮した日本民族にとつて、朝鮮民族は、朝鮮民族がアイヌ民族のやうに生活力を失はない限りは、永久に禍根となるであらう。

東京（下）の廣漠たる焼跡に行けば、所謂九尺二間にも足りない仮屋が、灰燼の中に、多くの所に建てられつゝある。また、私

10・20 本郷高知堂製

が出逢つた或る人は、深川の河岸に家を持つてゐて、その家が破壊されたのは、近々二三十年間のうちに此度が三度目だけれど、やはり其地に家を再建する覚悟ださうである。他の土地へ移り住む方法がないのではないが、感情上それが出来ないさうである。――人は自分の土地、自分の家を、何よりも愛する。愛してそして必要とする。

民族にとつては、自分の土地、自分の家は、即ち己が民族のふるさとである。

己が民族の国土を失って、世界を住居とする心境にはいり、そのために廣汎な精神的領域を獲得してる、或る少数の優れた人ダヤ人の如きもの、は、たゞ例外の例とするばかりであって、大多数の者にとっては、殊に民族全体としては、己が国土を失ふことは、最大の悲しみであらねばならぬ。

朝鮮民族が国土を失ったことについては、四圍の情によって、[illegible]止むを得ない趨勢だったかも知れないし、或はさうであったかも知れない。然し何れにしても、朝鮮民族が生活力を持ってることは事実であるし、まだ現在よりもよりよき状態に在るべき筈地があったとも、また日本としてうるべきよりよき方法があったらうとも、確かに想像せられる。

此の天災を機として、誤った一歩くとも最良であい一軌道を進んでゐたニつの民族の間に、一種陰惨な火が矢ぜられてし

まつた。個人的感情はとゝかくとも、民族としての感情が如何なるものであつたかは、東京附近の人々の一様に実感した所である。罹災者の群集の間にも、火災を免れた区域で警戒してる人々の間にも、保護されてる朝鮮人の間にも、一民族観念に根を張つた感情が、強く流れ出た相違ない。

斯かる感情の流れの方向と、今後の最も重要な問題となるべきものである。

本郷高知堂製